

# 高齢者における携帯電話利用とその社会関係

橋爪 絢子<sup>\*1</sup> 黒須 正明<sup>\*2</sup> 山中 敏正<sup>\*1</sup>

## The Use of Cell Phone and the Social Relationship among Senior People

Ayako Hashizume<sup>\*1</sup>, Masaaki Kurosu<sup>\*2</sup> and Toshimasa Yamanaka<sup>\*1</sup>

**Abstract** - Based on the data obtained from the interview and the questionnaire, the relationship between the use of cell phone and the social relation among senior people was analyzed. Concepts of the socio-gerontology (social network and social support), the social exchange theory (reciprocity), and the social capital theory (capital) were applied to interpret the research findings. Although the social capital theory is getting an attention in recent years, the concept of capital was necessary to be refined.

**Keywords:** social capital, social relationship, social exchange theory, senior people, communication, cell phone,

### 1. はじめに

携帯電話や e-mail などの ICT 技術の発展と普及は、人間のコミュニケーションを活性化させ、その厚みを増すことに貢献している。現状では、高齢者の携帯電話の利用率は他の世代と比較すると低い水準にあるが[1]、経年的には上向きの傾向にある。しかしながら、その利用を場面ごとに見てみると、携帯電話を保有している高齢者であっても、若年層のようにあらゆる場面において携帯電話を選択・利用しているわけではなく、携帯電話はコミュニケーションメディアの中核とまではなっていない[2]。それは、現代における高齢者にとって、比較的最近普及してきた携帯電話よりも、従来から利用してきたコミュニケーションメディアを利用し続ける場合もあるためである。その一方で、携帯電話は、親しい人とコミュニケーションするための新しい道具のひとつとしてとらえられている。

本論では、高齢者がどのような人間関係において携帯電話を利用しているのか、またそれが彼らの社会関係とどのような関連があるのかについて、先行研究を概観した後、質問紙等による調査結果に基づいた検討を行う。

### 2. 社会関係に関する先行研究

#### 2.1 高齢者の社会関係

社会老年学(socio-gerontology)では、高齢者がどのような人々と付き合い、それがどのような意味を持つのか、というような具体的な対人関係を社会関係と総称している[3]。この社会関係の下位概念には諸説あるが、多くの研究者が認めているのは、ソーシャルネットワーク(social network)とソーシャルサポート(social support)とである。

社会関係の下位概念であるソーシャルネットワークとソーシャルサポートの意味、および測定項目について表 1 にまとめた<sup>1</sup>。ソーシャルネットワークは、個人が他者との間にどのような関係を結んでいるかという全体を表す構造的なものである[4]。ソーシャルサポートは、個人が他者との間に交わす支援や援助を表す機能的なものである[4]。

ソーシャルネットワークは、家族や親戚、友人、近所の人などの人間関係について、その数や総数(規模)、交流・接触の頻度・電話の回数(頻度)、親密性(密度)、時間的・空間的な広がり(広さ)、関係の継続期間(継続性)などをもとに測定される[5]。

ソーシャルサポートは、サポートを提供する他者(サポート源)、サポートの受領か提供か(サポートの方向)、情緒的サポートや手段的サポートなど(サポートの種類)、肯定的なサポートか否定的なサポートか(サポートの性質)、などについて測定が行われ、健康指標や幸福感などへの影響(サポートの効果)がその調査の対象となる[5]。

\*1: 筑波大学大学院 人間総合科学研究科

\*2: 独立行政法人 メディア教育開発センター 研究開発部

\*1: Graduate School of Comprehensive Human Science, University of Tsukuba.

\*2: National Institute of Multimedia Education (NIME), Research and Development Division.

表1 社会関係の下位概念の意味と測定項目†  
Table 1 Meaning and Measurement Item in the Subordinate Concept of Social Relationship†

	社会関係	
	ソーシャルネットワーク	ソーシャルサポート
意味	個人が他者との間に 取り結んでいる関係の全体 (他者との関係の 構造に関わる概念)	他者との間で取り交わされる さまざまな支援や援助 (他者との関係の 機能に関わる概念)
測定項目	規模、広さ、頻度、 密度、継続性	種類、方向性、性質、 サポート源

## 2.2 社会的交換理論

Homan の社会的交換理論 (social exchange theory)[6]は、社会心理学における対人関係に関する基本的理論である。この理論では、他者との間に発生する労力や好意の交換を含む広義での交換を社会的交換とよび、社会的交換を支配している規範やそのプロセスを、利得最大化原理のもとで明らかにし、対人行動の解釈を目指している。

この考え方は、後にいくつかのモデルに展開され、いわゆる「お返し」をすることで対人関係が維持されていくという互惠性(社会関係資本を説明する場合に互酬性と和訳されることが多いが、いずれも reciprocity の訳である)を重んじる立場(互惠モデル)、投入(input)と結果(output)の量の比率を一定にして公平さを重んじる立場(平衡モデル)、報酬(結果)から費用を引いた成果に対して、選択比較水準という概念を導入した利得計算が行われるという立場(相互依存性モデル)などがある。

## 2.3 社会関係資本

近年、社会関係資本(social capital)という概念が社会学や経済学で注目されている。これは、人間関係を資本の一種と捉え、その増強が社会の活性化につながるというような考え方である。たとえば、宮田は「信頼や互酬性の規範が成り立っている網の目状の社会ネットワークとそこに埋め込まれた社会資源」とこれを定義している[7]。

資本としての側面について、前述の宮田は、「長期的に社会のために価値あるものを生み出せる、共通の目標達成を促進し、他の手段では不可能な協力的行動を促進させる、累積的であり、適切な投資によってしかるべき配当が期待される」という意味で資本とみなせるとしている[7]。もっとも、特に日本においては比較的最近になって注目され

るようになった概念であるため、その定義や資本としての考え方は多様で、社会学、経済学等、研究者の立脚点によって、こまかな点については様々な考え方の相違がある。

そうした中で、社会関係資本に二つのタイプがあることには概ね合意が得られている。それは、既存の関係を強化する形の結束型(bonding)と、新たな関係性を構築する橋渡し型(bridging)である。結束型社会関係資本には、精神的健康増進や社会福祉の向上を導く効果があり、橋渡し型社会関係資本には社会的評判の獲得や社会参加促進の効果があるとされる[8]。

## 3. 高齢者の携帯電話利用に見られる社会関係

### 3.1 高齢者の携帯電話利用に関する調査

橋爪は、2007年に修士論文の研究として、高齢者の携帯電話利用に関する調査を実施した[9]。この研究では、高齢者18名(東京都・横浜市在住)に対して半構造化法でインタビュー調査を実施した後、その結果をもとに作成した質問紙を用いて、70名(千葉市在住50名+石垣市在住20名)の高齢者に対して調査を行った。主な質問内容は、家族構成、携帯電話利用歴と利用実態、使っている機能や問題が起きた場合の対処法などである。本論では、その一部のデータ(68名分：インタビュー調査、および千葉市での質問紙調査の結果)を利用し、分析を行う。

### 3.2 家族との社会関係と携帯電話利用

携帯電話を利用し始めたきっかけとして、半数にあたる34名が(インタビュー調査、および質問紙調査合わせて)、「家族と連絡を取りやすくするため」と家族との連絡を理由にあげた。さらに、そのほぼ半数である19名が、実際に携帯電話を用いて、家族の誰かとほぼ毎日連絡を取り合っている現状だった。

また、「仕事で必要だったため」という理由も携帯電話を利用し始めたきっかけとして多数あげられたが(27名)、退職などを経た現在は家族との連絡用に利用目的が変わり、実際に携帯電話を用いて、家族の誰かとほぼ毎日連絡を取り合っているケースも多かった(9名)。

### 3.3 家族以外の人々との社会関係と携帯電話利用

前述のように、家族との連絡や仕事での必要性が携帯電話の利用し始めた理由であるケースが多かったが、実際に携帯電話を用いて毎日連絡を取り合っているケースは、仕事の関係者との間には存在しなかった。仕事の関係者との携帯電話を用いた連絡頻度は、「週1-3回」と「年数回」というケ

ースが多かった(それぞれ12名ずつ)。

近所づきあいや趣味の友人、その他の友人と携帯電話を用いて毎日連絡を取り合っている人は少なく(4名)、「週1-3回」および「月1-3回」というケースが多かった。ただし、これらの友人と携帯電話を用いて毎日連絡を取り合っている4名は、各属性の相手それぞれと携帯電話を用いた連絡を毎日取り合っていた。

また、近所づきあいや友人(趣味・その他)、仕事の関連者などの各属性における連絡を取り合う相手のおよそ8割は、同年代で同性の人たちであった。

#### 4. 高齢者の携帯電話利用とその子どもとの社会関係

##### 4.1 子どもとの連絡

携帯電話を用いて最も頻繁に連絡を取り合う相手は「子ども」であり、ほぼ毎日連絡を取るインフォーマントが17名いた。子どもとの居住形態の同居か別居かという違いは、子どもとの連絡頻度そのものには影響していないようであった。例えば、同居している子どもと別居している子どもの両方がいるインフォーマントの場合に、同居している子どもとはほぼ毎日連絡を取り合うが、別居している子どもとは週に1-3回程度しか連絡を取らないケース、あるいはその逆のケースが存在している。また、同居している子どもが複数いるインフォーマントの場合でも、同居しているある子どもとはほぼ毎日連絡を取り合うが、別の同居している子どもとは月に1-3回程度しか連絡を取らないというケースが存在している。複数の別居している子どもがいるインフォーマントの場合にも同様であった。

しかしながら、連絡を取る理由について着目すると、同居している子どもとは生活を共にしているために、帰宅時間や食事に関することで頻繁に連絡を取り合うケースや、顔を合わせる機会多いので特に連絡する必要性がないと考えているケースがある。また、別居している子どもとは離れて暮らしているために、様子が心配になったり声が聞きたくなくなったりして頻繁に連絡を取り合うケースや、急用でない限り連絡しにくいと考えているケースがある。その一方で、子どもから携帯電話に連絡があるためにインフォーマント自身も携帯電話を用いることが多くなった場合や、在宅時には主に固定電話を用いてやり取りをする場合なども存在している。別居している子どもに対しては、

離れて暮らしているために話し出すと長くなることを考慮して、固定電話を利用しているケースも存在していた。

このように、携帯電話を用いた子どもとの連絡頻度は居住形態によらず多様であるが、連絡を取る理由は居住形態によって異なっている点が存在する。それらを表2に示す。配偶者に対しても、携帯電話で頻繁に連絡を取るケースと取らないケースのそれぞれがあったが、表2に示した同居している子どもの場合の理由と同様である。

さらに、別居している子どもとはほぼ毎日連絡を取っているケースは女性の高齢者に比較的多く、その相手も娘であることが多かった。別居している娘は結婚している場合が多く、娘が仕事を持っている場合にはその援助のために、また仕事を持っていない場合には手すきの時間帯が合致することが、別居している娘と頻繁に連絡する理由のようである。逆に、同居している子どもと頻繁に連絡を取っているケースは比較的男性の高齢者に多かった。

##### 4.2 子どもとのソーシャルサポート

携帯電話の利用が子どもとの社会関係における相互のサポートにつながっているケースが表3のように多く見られた。

健康な高齢者の場合には、特に仕事をしている子どもから買い物を頼まれたり、孫の世話を頼まれたりするなど、サポートを依頼されるケースが多く、実際に子どもに対して労力としてのサポートをする側になっている。その一方で、例えば、高齢である自分や配偶者の身に何か起きた際に携帯電話を用いれば、どこにいてもすぐに子どもに連絡できることに対して安心感を得ているという面がある。また、携帯電話のメールを用いると、対面では出てこないような素直で優しい言葉を子どもからもらえることもある。特に別居している子どもの場合には愚痴を聞いてもらったりしているという点からも、携帯電話を用いた子どもとのコミュニケーションは、高齢者の情緒的なサポートにつながっているといえる。

さらに、携帯電話の利用に際し、操作に困った場合にどのような対処をするかについて、最も多い回答は「取扱説明書で調べる」であったが(34名)、「子どもに教えてもらう」という回答をした人も多く(26名)、そのうち18名は女性の高齢者であった。また、その相手は息子よりも娘であるケースが多かった。携帯電話で毎日連絡を取っているような同居している子どもがいる場合でも、操作に困っ

たときに「取扱説明書で調べる」対処行動を取るケースは多く、「お店に聞きに行く」「放置する」ケースも見られた。

表2 子どもとの居住形態と連絡頻度別理由  
Table 2 Reasons for Style of Resident and Frequency of Communication

	同居している子ども	別居している子ども
携帯電話で頻繁に連絡を取る	生活共有部分の連絡、(例:帰宅時間の連絡、食事に関する連絡など)相手からも連絡が来る	様子を伺う、声が聞きたい、相手からも連絡が来る
携帯電話であまり連絡を取らない	顔を合わせているので連絡の必要性が低い、家にいるときには固定電話を用いる	急用以外は連絡の必要性が低い、長くなるので固定電話を用いる

表3 子どもとのソーシャルサポート  
Table 3 Social Support with Children

ソーシャルサポートの方向	子どもから高齢者へのソーシャルサポート	高齢者から子どもへのソーシャルサポート
特徴	特に高齢者が健康な場合には情緒的サポートが多い	何かを頼まれた場合の手段的サポートを行う
具体例	・自分や配偶者に何かがあったときに子どもに連絡できるという安心感が感じられる ・携帯電話のメールを利用すると対面ではなかなかいづらにお礼や感謝といった子どもの優しい一面を見ることが出来る ・別居している子どもでも日常的な話を聞いてもらえば気持ち落ち着く	・仕事をしている子どもから買い物や孫の世話を頼まれる ・孫が急病になったときに幼稚園や保育園などに迎えにゆくことを頼まれる

### 5. 考察

以上の結果から、「3. 高齢者の携帯電話利用に見られる社会関係」および「4. 高齢者の携帯電話利用とその子どもとの社会関係」で述べてきた高齢者の携帯電話利用と社会関係に関する事実を、2に述べた先行研究の考え方に照らして考察する。

社会老年学で言及される社会関係を表すソーシャルネットワークとソーシャルサポートについては、3.に見られた一般的な社会関係や4.に見られた子どもとの社会関係の調査結果との間に明らかな関係が見られる。

高齢者が携帯電話を利用して連絡を取り合っている主な相手は家族で、表2に見られるように特に子どもである場合が多い。いいかえれば、家族、主に子どもとの間には携帯電話を利用したソーシャルネットワークが構築されている。またソーシ

ヤルサポートについては表3に見られるように双方向のサポートが行われている。この点については、高齢化に伴い、子どもからサポートされるより子どもをサポートする比率が高くなるという報告もある[10]。しかしながら、携帯電話で毎日連絡を取っているような同居している子どもがいる場合でも、携帯電話の操作に困ったときに自分で対処しようとするなど、コミュニケーションの頻度がサポートの依存度にはつながらないようである。

なお、娘の婿の登場するケースはまれであったが、息子の嫁に関しては居住形態に関わらず、ときどき連絡を取り合ったり、携帯電話操作のわからない点を教えてもらったりする相手として登場するケースがあった。

つぎに、社会的交換理論では、互酬性が重要な概念のひとつとなっているが、高齢者と子どもとの連絡頻度は発信・着信ともにほぼ同数であり、いいかえれば両者の関係は一方向的な関係ではなく双方向的な関係であることが確認された。

社会関係資本の考え方はソーシャルネットワークの考え方に近いように見えるが、後者は社会関係の構造に言及しているのに対し、前者がそこに社会的な意義を見ようとしている点が異なる。しかし、ベースとなる社会関係は誰彼を問わないものではなく、相手との関係性に依存する特殊性を持っている。特に高齢者の場合には、家族、とりわけ子どもとの関係が重要になる。ただし、子どもとの関係のなかに見出される社会的意義は、必ずしも常にポジティブなものではなく、相手への依頼心を増長させてしまう場合もある。

また常に濃密な関係性に基づくものでもなく、普段は薄い関係性であっても、それをキープしておくことにより、いざというときに活用できるようにしておく、という側面もある。むしろ、そうした貯蓄性の故に「資本」という言葉が相応しいともいえる。

さらに、社会関係としての基本的な次元である、広さや密度、頻度、継続性、規模といった点についての定量的な検討が、資本という概念を導入している割には曖昧であるともいえる。

このように、社会関係資本の考え方は社会関係の重要な側面に関わるものでありながら、今一步の精査が必要のように思われる。

### 6. 結論

本論では、高齢者がどのような人間関係において携帯電話を利用しているのかを調査したインタ

ビューと質問紙の結果をもとに、高齢者の携帯電話利用と社会関係について分析を行った。社会老年学からはソーシャルネットワークとソーシャルサポートという概念を援用し、家族、特に子どもとの関係を整理した。また社会的交換理論を援用することにより互酬性に関する特徴が整理された。社会関係資本の考え方については、資本という概念のとらえ方など、今後、さらに概念的検討を要する部分が見受けられた。

#### 謝辞

本調査は、黒須は、総合研究大学院大学葉山高等研究センター助成金により実施した。また橋爪は、財団法人松下国際財団平成20年度研究助成により実施した。ここに記して両助成団体に対する謝意をあらわすものである。

#### 参考文献

- [1] 総務省情報通信政策局：平成18年通信利用動向調査報告書；総務省（2006）。
- [2] Hashizume, A., Kurosu, M., Kaneko, T. : The Choice of Communication Media and the Use of Mobile Phone among Senior Users and Young Users; The 8th Asia-Pacific Conference on Computer Human Interaction, Springer-Verlag Berlin Heidelberg, pp. 427-436 (2008).
- [3] 野口：老年期の社会関係；老年学入門（柴田、芳賀、他編）、川島書店（1993）。
- [4] 浅川：高齢期の間関係；新社会老年学（古谷野、安藤編）、ワールドプランニング、（2003）。
- [5] 平上：高齢者の社会関係；吉備国際大学大学院社会学研究科論叢, 1, (1999)。
- [6] Homans, C.: Social Behavior -Its Elementary Forms-; Harcourt Brace (1974), 橋本(訳)：社会行動 -その基本的形態-; 誠信書房 (1978)。
- [7] 宮田：きずなをつなぐメディア -ネット時代の社会関係資本-; NTT出版 (2005)。
- [8] 菅谷, 金山：ネット時代の社会関係資本形成と市民意識；慶應義塾大学出版会 (2007)。
- [9] 橋爪：高齢者の特性や利用状況に適合した携帯電話の条件；人間科学研究, 早稲田大学人間科学学術院, Vol.20, 補遺号 (2008)。
- [10] 直井：幸福に老いるために 勁草書房 (2001)

†: [4], [5]をもとに筆者らが作成した。